

*****目次*****

P1	新副代表の挨拶	中山 勝一
P2	新専任幹事の挨拶	前田 長治
	リレー随筆	永野 徹
P3	仲間たちの近況報告 (1)	
	1 班	宮阪 信次
	2 班	五家 正敏
P4	仲間たちの近況報告 (2)	
	3 班	石川 隆一
	4 班	青野 正明
P5	私の玉手箱	内田 きみ子
P6	自由コーナー	斎藤 ちづみ
P7	絵画コーナー	藤川 宗昭
	絵手紙コーナー	篠田 富子
P8	写真コーナー	玉尾 洋一
P9	樹形ウォッチング	遊上 真一
P10	俳句・川柳	谷坂 修二

◇自然と文化だより◇

今号も多くの皆様のご協力が得られ、10ページにすることができました。

写真が多くなりましたが、各号で対象期間中の行事をトピックス的に取り上げることが出来ればと思い、今回は夏季1泊旅行写真を掲載させてもらいました。

次号以降でも続けることが出来ればと思います。

N.A



～新副代表のご挨拶～

副代表 中山 勝一

自然と文化科に参加して四年になります。1年間の企画委員経験から内容把握も不十分なまま、昨年度企画専任幹事を引き受け、年度後半に自然と文化の企画とは何だろうか、と企画委員の皆さんにアンケートなどで模索している時に、溝部前代表から副代表になって欲しいと声が掛かりました。人材豊富な当科の中で、「自然と文化」を未だ理解していない私など器でもなく、その任にあらずとお断りしましたが、高等科11期の宮澤さんが次期代表になられ、首脳陣も随分若返るという事で、若いメンバーの活動のバックアップが少しでも出来ればと思いお引き受けしました。

私が担当する企画委員会は「自然と文化」の文化の部分で代表すると言われ、最近は歴史文化散策を主な活動の範囲として来ました。一方で「お寺巡りはかなわん」「博物館は勘弁して」という声もあります。「自然と文化科」の理念については、「自然と文化科」の設立に携わられ、その後代表を務められた後藤銃吾さんが10年誌で、「科の目標は、自然については植物観察を中心が暗黙の了解でしたが、文化については多様な受け止め方があり、統一した見解はなく、活動範囲を限定せずに、長い人類の歴史で自然との共生を社会に発信できればと考えています。今後は、歴史・文化を自然の面から解析するのも面白い。」と述べられています。

「文化」という言葉はすでに2000年前の中国古書「易経」に見られます。「武力ではなく、人文を持って教化する」という意味で使われました。現在では「文化」は人間の生活様式の全体。人類が築き上げてきた有形・無形の成果の総体。民族・地域・社会に固有の文化があり、伝習され発展してきたと定義されています。人間の生活様式の総体の対比には自然環境があり、社会の存在様式とは、その人たちが住む自然環境とその理念的思考とのセットと考えられています。「文化」をこの様に捉えれば自然との共生のみならず、自然環境から何を学んだかを探求することは「自然と文化科」の理念そのものだと思います。人口密度が高い日本は、更に都市一極集中と農村・山村の荒廃が進み、自然に寄り添った伝統文化、農村文化も後退しています。

大人数の活動ですので行動に制約はありますが、科員の皆様とともに自然・自然環境から人類が学んだ「文化」について考え、活動していければと思います。ご協力のほど宜しくお願い致します。

総務専任幹事になって

総務専任幹事 前田 長治

総務専任幹事になった動機は、班長の負担軽減とジェネレーションギャップを埋めるために微力を尽くすためです。ごく一部の先輩ですが、私が班長の時に、一覧表で班員全員の出欠を把握する様にと提案した先輩がおられました。現に前年度は実施していた班からの引継ぎの様でした。さらに全班員に開示が前提でした。これは、却下しました。もちろん却下するまでには、時間と労力が必要でした。また、懇親会を設定し、5時開始にすると、一部の先輩は3時に委員会等が終了するので、この2時間の時間つぶしの提案がなかったとメールで攻め立てられました。ごくごく一部に、班長を助けるのではなく、つぶしにかかる先輩がおられる様です。なぜなら、この先輩は班長経験がないために、班長の負担が理解できないと思われます。悪気がないのかも知れませんが。

当科の班長と本科の班長は全く立場が異なるのです。本科は同級生ですので、みんな協力的ですし、感謝もされます。当科では云々です。

ジェネレーションギャップは、どこでも存在することです。お互いの世代の考え方を認めることだと思います。価値観の押しつけがあると反発になるとと思います。

さらに、最近、退科や休科される方は、入科の浅い方が多いと感じています。これは、一つの現象の端緒かも知れません。先輩には、居心地が良く、後輩には居心地の悪い状況があるのではないかと感じています。この状況の解消に微力を尽くしたいと思いますので、ご指導ご鞭撻をお願いします。



中山健康登山



2班 永野 徹

平成27年夏、中山寺奥の院の大改修落成式が行われた機会に健康の為、奥の院参拝登山を決意し、その年8月から始めた中

山寺奥の院健康登山が、400日で300回の参拝を達成する事が出来ました。

自宅を出発して帰宅するまでのコースは略楕円軌道、その短径の一方にある自宅を出発して最下部（長径下端）の中山寺まで下り、二つ隣の尾根を登り、自宅と正反対側が奥ノ院。更に中山山頂（478m）を目指して登り、山頂近くで団地に降りて来る。標高は約450m、一周で約13000歩（約9km）、所要3時間コースである。300回参拝で掲示板に名前が出て、励みになると同時に金剛杖が授与される。毎回10円の賽銭が金剛杖に化けたことになる。約300回毎に次の衣装が授与されて最終的には全ての巡礼衣装が揃う事になる。健康成果はヘモグロビンA1Cが8.2から6.5まで下がった事。

中山寺は聖徳太子の創建で最古の観音霊場。中古に西国三十三箇所観音巡礼が始まると中山寺は極楽一番札所であったが、花山法皇の時、参拝順で紀州の那智寺が一番札所と変更になり、現在は24番札所である。秀吉が祈願して秀頼が誕生、江戸末期には中山一位局が安産祈願して明治天皇が無事誕生された事から、一躍、中山寺は安産祈願寺として有名になった。毎年11月（収穫感謝日）15日（鬼宿日）は七五三参りで大混雑。三歳は男女児とも「髪置き」で、「髪の毛から病気が入ってくる」と信じられ剃っていた髪の毛を伸ばし始める。男の子は五歳になると「袴着」と言い袴を身につけ、間違いを起したら責任を取るように脇差を与えられた。女の子は七歳になると「帯解き」と言い、略式の着物から本式の着物が与られて大人の仲間入りをする。武家社会では14歳で元服、現在は20歳で成人式となると昔は早かったと驚く。このような行事の真の意味を子供や子孫に伝える事が私達の大事な役割ではないかと感じる次第です。

NIFREL：～に触れることができたか？

1 班 宮阪 信次

(はじめに)

私の息子は重度障害者で、8年前から自宅で介護ヘルパーさんたちと24時間自立生活をしている。彼は、年に数回、車いすでの外出を楽しみにしていて、コブクロの生ライブや USJ 訪問で余命を楽しんでいる。彼が、我々両親に、一緒に NIFREL に行かないかと誘ってくれ、今年2回行った時の思い出を綴る。

(NIFREL 何かご存知ですか？)

EXPO ランドの跡地に2年前 EXPO シティとして、再スタートした。その施設の人気コーナーが「NIFREL」だ。「NIFREL」とは、「～～に触れる」だそうで、パンフレットによると、水族館、動物園、美術館のジャンルを超えた「生きているミュージアム」だそうだ。



(実際訪問した時の感想)

<◎と●評価>

◎できる限り生き物に触れるため、柵を設けず鳥や動物が放し飼いされている区画がある。キツネザル、ペリカンやリスザルなどが放たれていて、色んな動物も間近で見られて本当に楽しい施設といえる。大きなペリカンが頭の上を飛んできたのには驚かされた。

◎ホワイトタイガーは NIFREL のシンボルだ。水中遊泳を目の前で見られるのはここだけだ。

●入場規制してないので中はたいへん混雑していて、ゆっくり見ることは困難だ。とにかく何をするにも行列なので疲れた。

●水族館はブログで「水槽が小さくて生き物が少しかわいそう」と書かれていたが、その意味はなんとなく分かった気がする。しかも、入場料は海遊館と同じで、やや高い。

(最後に)

家族の絆を確認でき、感謝。本音を言えば、炎天下の天王寺動物園の方をお勧めする。



青春の真っ只中？ ～迷っているばかり～

2 班 五家 正敏

人生を半ば過ぎた頃から日記を書くことにした。最初は1年間ものを利用して、現在は10年連用ダイアリーを愛用している。当日に過去は何をしていたのかが一目でわかるのである。10年を超えて借りている市民農園での農作業の目安にも重宝している。年間カレンダーの欄にその日の主要行事も記載している。私的な予定は青で、それ以外は赤で記入している。適当に調和がとれていたのがこの1年半は真っ赤なのである。

これまでは社会科学的な領域で過ごしてきたため、第2の人生は自然科学の分野でとの思いで入校した。本科修了前にアシスタントにとの話があり、高等科に進むことにしていたので断り続けたが、最後は引き受けることになった。高等科に行きながらのアシスタント業務の他に、当大学の自然学、菌類、地方組織、さらに地元の里山保全、森林関係の会等に首を突っ込んでいる。今年は高等科の代わりに「自然と文化科」の予定が加わった。あれもこれもやってみたい、間口だけは広げておこうとの安易な思いが生んだ結果であることは自覚している。

ゴーギャンの言葉にあるように「我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへいくのか」と問いかけてくる別の自分がある。満足に各会の行事に参加できない、不義理をするような状態でよいのかと迫ってくる。予定が重なって「自然と文化科」の行事に参加できない時、最近はい訳がましくなるので理由を言わないことが多くなった。ある先輩から数度となく「活動先を絞っていかないと加齢により徐々に体が動かなくなるよ」との忠告もいただいている。



こんな状態のなかで「もう暫くこのままでいいか、なるようになるさ」と甘い声で囁くまた別の自分がある。迷うことが青春の特徴であるとの懐かしい歌「青春時代」やサミュエル・ウルマンの「青春の詩」が思い出される。しかし、何だか落ち着かない日々が続いている。青春の真っ只中にいるのだろうか？

ボタニカルアートとの出会い

3 班 石川 隆一

昨年 6 月に心筋梗塞を患い、自然観察など野外での活動が制限されたことを機会に、ボタニカルアートを始めました。水彩画は好きで、中学生の頃までは時々描いていましたが、その後はもっぱら鑑賞するだけになっていました。

始めるに当たり画材用具一式を新調しました。固形の水彩絵の具はとても可愛らしく、綺麗です。絵筆もこれまで使っていたものより繊細ですが腰が強く感じられます。気恥ずかしいですが、とても嬉しくてたまりませんでした。

ボタニカルアートでは、一定の約束事があります。例えば、実物大で書く、背景は書かない、一枚に一種類、自然状態かそれに近いものを描く、斜め左上から光を当てる、などです。少し窮屈に思えますが、ルールがあるから書き易いとも言えます。私は自由に構図を決め、観察した植物の特徴を写し取れるデッサンが一番好きです。彩色は実物の色調を再現し、薄い色を 3~4 回塗り重ねて行きます。色の調合は難しく違った色調の絵になったり、濃く塗りすぎて光や陰影が上手く表現できなかったりしています。

家にある植物を描きました。描いた順に、センリョウ、シクラメン、ハナミズキ、カラタネオガタマです。絵の原寸は F4 大です。こうして順に並べてみると少しずつは上達しているかなあと



思ったりします。



これからの楽しみとして、植物観察の表現の一つとして作品を書き溜めて行きたいと思っています。7 月と 10 月に教室の作品展があり、励みになっています。ご覧頂ければ幸いです。

神戸空港 10 周年ミステリーツアー

4 班 青野 正明

5 月 26 日から 3 泊 4 日で神戸空港開港 10 周年ミステリーツアーに参加した。今回のミステリーツアーは片道 600 km 以上の空の旅という以外どこに行くのか、どこで泊まるのか当日までわからない仕組みである。ただ、今回はパンフレットの写真から北海道ということがわかった。

集合は神戸空港で初めてこの空港からの飛行となった。ここで、ようやく旅行日程をもらって全容が明らかになった。本来なら見ないで参加するのが筋であるがどうしても見ないではいけない。神戸空港開港 10 周年 (2006 年 2 月開港) であるが開港して間もない時、1 度来たことがある。当時は閑散としていてコーヒーの香りが漂っていた。飛行機の便数も少なく中華料理を食べながら飛行機が飛ぶのを見ていた覚えがある。今は ANA とスカイマークが運航し便数も増えている。ここ数年、赤字が続いているが来春、民営化され関空・大阪 (伊丹)・神戸の 3 空港が関西エアポートの運営になるようである。10 月にも契約が結ばれる予定である。

ミステリーツアーは旅行の行程がわかれば、ただのツアー旅行である。違ふとすればあまりツアーで行かないようなところを観光する。今回は支笏湖、洞爺湖、ニセコ、積丹半島、札幌、小樽などのエリアを観光した。珍しいところとして昭和新山、サイロ展望台、神威岬、旧北海道庁などがあつた。昭和新山は国の特別天然記念物に指定され、奇跡の山ともいわれている。平坦な麦畑が地震で隆起し 2 年ほどでできた。サイロ展望台は洞爺湖大パノラマが広がる絶景ポイントである。神威岬は積丹ブルーの海の美しいところだが行ったときは曇りで積丹ブルーは見られなかった。旧北海道庁は赤れんが庁舎で知られる。建物の内部まで観光するのは珍しい。

千歳空港から支笏湖に行くのにまっすぐな道路の両脇にフキの群生があり延々と続いている。その脇にサイクリングロードがあり、ここでサイクリングができれば最高だと思った。北海道では竹がなく筍が取れないそうである。代わりにネマガリダケ (ササ) の芽を食べるそうである。いつ行っても魅力ある北海道である。

トールペイントに出会って

2班 内田 きみ子

トールペイントを初めて知ったのは10数年前のことです。ひょんなことから娘の友人のお母さんの美容室に行ったことがきっかけでした。子供同士が友達ということもあり話も弾み、その中でトールペイントの話題になったのです。

お試しに一回やったばかりで習いに行こうと思っているという話だったので、私も仲間に入れて欲しいと御願いをし、まずは家の近くの方にアクリル絵の具を使ってのトールペイントを習い始めました。

アクリル絵具は速乾性もあって作品は思ったより早く仕上がるものでしたが、何年か習ううちだんだん物足りなくなり、ある時日本デコラティブペインティング協会主催の展示会が大阪国際ホテルであることを知り出かけました。

(大阪の会場は3年に1回)

勿論出かける前には気に入った作品があれば先生の名前をチェックし、車で行けるところならそちらに習いに行こうと決めていました。

そこで今の先生の作品に出会ったのです。

100点以上を超える作品の中から「これいい、これもいい。」と言った作品が二人とも同じだったので、帰ってすぐに東京のペインティング協会に事情を話して電話番号を教えてもらい留守電にメッセージを入れて連絡を待ちました。

今も一緒に行っている4人でお宅に伺い、オイル絵の具を使いお試し作品を描いたのが初めてで、それ以来今の教室に通っています。

その時に先生からオイルに代えたら～という勧めもあり現在はオイル絵の具を使って作品を仕上げています。

初めに絵の具を混ぜて色を作ってから描き始めるのですが、オイル絵の具はなかなか乾きにくい



ことと一度全部の画面を塗り終わると、また次にグレース（より明暗をつける為に行う）という作業をするので時間もかかります。

使用する色は例えば葉なら青と黄色を練り合わせてその題材に合う基本色を作り、その色に他の色を混ぜて暗い色や明るい色と何段階かの色を作るので、見た目が同じようでも出来上がりの作品も当然のことながら微妙に違って来ます。

かといって塗った所を何度も触りすぎるとだんだんと色が濁り、なかなか思い通りにならないものです。

出来上がって上手く二スが塗れたらほっとします。折角仕上げて二スを塗る時に、間に空気が入って失敗したこともあります。

そんな思いをしながら早いもので先生と出会って、13年になろうとしています。

展示会で見た先生の2作品も描かせてもらえるまでは頑張っで行こうね～と話していましたが、念願がかないようやく仕上げる事が出来ました。



動物は毛並や目等、私にとっては花を描くより難しく何とか仕上げられたのは先生の魔法の手のお陰だと思っています。

カリキュラムでは小さな作品も描きましたが、これからは多くの作品は要らないので一年に1作品でもいいからと大きな作品にチャレンジしています。

今手がけている作品もこの後はグレース作業なので早ければ年内、遅くとも春には完成すると思われます。先生にこの後どうしようと相談したところオリジナル作品にしたら～ということで、来月からは気に入った花や果物などの写真を撮りながらそれと並行してグレースをすることが決まり、目下何を題材にしようか思案中です。

ショクダイオオコンニャク

(武田薬品植物園特別公開)

燭台大蒟蒻 *Amorphophallus titanum* Becc.(サトイモ科コンニャク属)

別名 スマトラオオコンニャク

インドネシア スマトラ島の熱帯雨林に自生。

8月2日付の新聞の記事で知り見に行った。

1933年開園当時に種子を入手され栽培されていた。

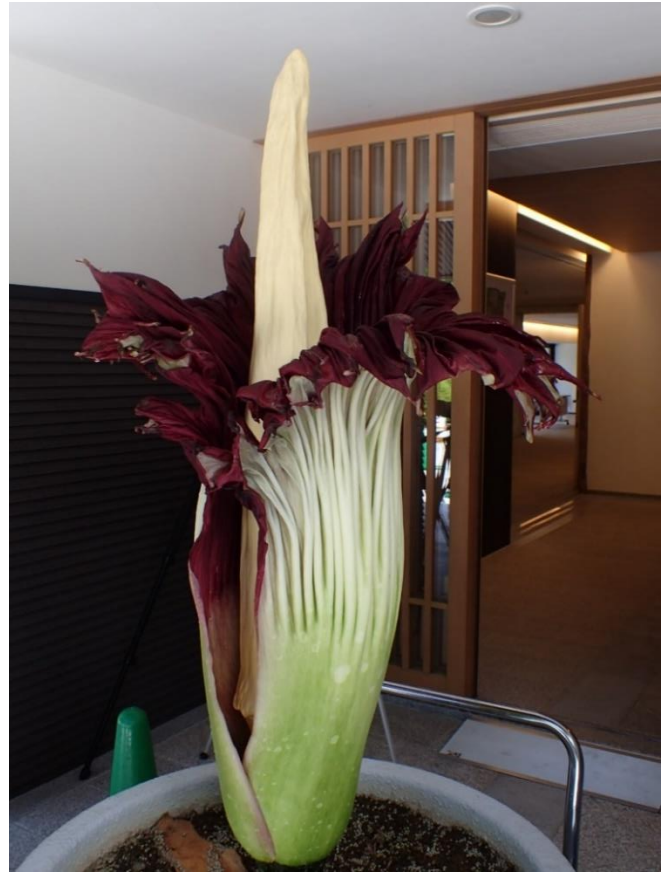
開花したのは前日の8月1日、関西で初めて開花。

7年に1度しか咲かない。国内で16例目。

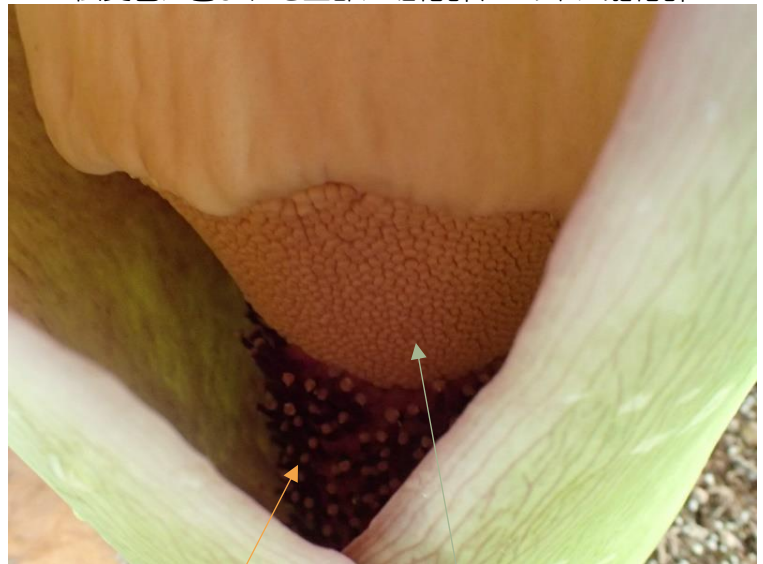
世界屈指の巨大な花で開花時に強烈な腐臭を出す事から死体花(corpse flower)と呼ばれている。

興味があったがすでに腐臭はなかった。

1班 斎藤 ちづみ



肉穂花序と花びら状の仏炎苞。高さ1m程
仏炎苞に包まれた上部に雄花群、その下に雌花群。



雌花

雄花

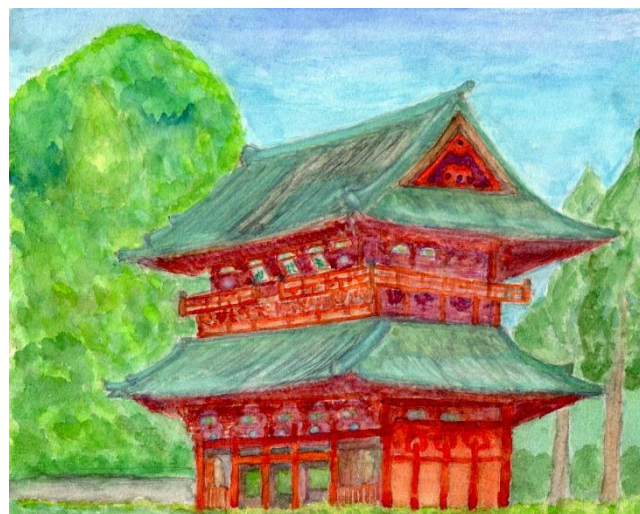
開花時の強烈な腐臭で花粉を付けた甲虫を誘引する。甲虫は肉穂花序の上部から仏炎苞の花序最下部まで滑り落ち、雌花群の柱頭に花粉を付け受粉させる。雌花の受粉機能は停止(雌性先熟)替わって雄花群の葯から花粉が出て甲虫の体に付着、そして付属体と仏炎苞が枯死崩壊し虫は脱出する。受粉し成熟すると液果となり鳥散布される。糞虫、シデムシ類の甲虫が花粉を媒介する。(ウィキペディアより)

高野山にて

2班 藤川 宗昭



高野山 根本大塔



高野山 大門

絵手紙

2班 篠田 富子



やまびこ館



ラショウモンカズラ



古川祭



古川祭からくり人形



エンレイソウ



古川の町並み



◆◆◆ 上部と下部の色が 違う樹 ◆◆◆

4 班 遊上 眞一

樹形を観察していると、時々樹皮の色が上と下で全く違う樹に出会うことがあります。
何が原因でそうなったのか真相は分かりませんが、不思議な世界が広がっています。



枚方市山田池公園の芝生の丘に生えるギンドロ。どの樹も下部は黒々としていますが、
上部は葉裏と同様に白い毛に覆われて真っ白で、雪をかぶっているのかと思いました。



飛騨市古川町にあるこの地方最大の木造建築本光寺。境内には立派なアカマツが。
下部は黒っぽい亀甲模様の厚いコルク層ですが、上部はハゲて赤褐色に光っています。
これは樹皮を薄くして、その下の皮層組織が葉緑体を持ち、光合成を行なう為だそうです。



京都北山の八丁平に生える、ミズナラ。ギンドロとは逆に、下部はペンキを塗ったように真っ白。
上部は風雪に耐えた渋い貫禄のある表情をしています。
これは積雪で下部には地衣類やコケが付かないからでしょうか？

俳句・川柳

4班 谷坂 修二

天生湿原

白き穂のウワミズザクラ沼に映え

山雲に払われ開くリンドウ花

樺カツラ天生の沼を語り合い

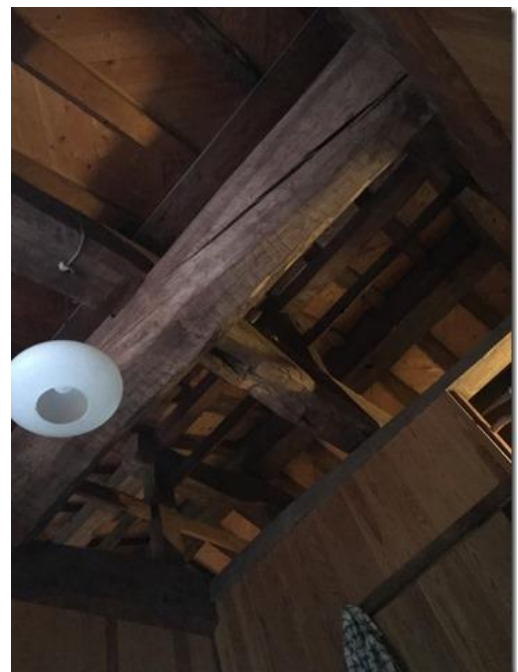
ワオワオーカツラがそびえ原始林

蠟燭の科学も知らず火揺らぐ

雨飾山

雪溪の傍は花はな花と花盛り

山小屋の曲がりても耐え太き梁



自然と文化だより
皆様のご協力により34号が発
行出来ました。有難うございま
した。(広報委員会)